Musa 博物館学芸員課程年報　第 39 号
pp.1 ～ 5　2025 年 3 月

博物館保存資料の取捨選択

初宿　成彦 *

要　旨

展示や教育など博物館の社会的機能が様々ある中で、資料保管だけは博物館が独自建物を伴って担うしかない。どこも収蔵庫が満杯で、増築も厳しい現状から、資料の取捨選択というのが博物館側にも求められている。データがない標本、白黒の古い静止画などは残す価値は一部を除きほとんどない。本や雑誌など公式出版物は他施設も保有しているので、割り切って廃棄すべきである。

キーワード

収蔵庫、地域博物館、虫食い、デジタル化、図書、廃棄

1．資料保管は博物館がやるしかない

博物館ではさまざまな事業を行なっており、いずれも大切な社会的役割があるが、それらのうち資料保管事業だけはどうしても、博物館が独自建物を伴って担うしかない。例えば、博物館のもっとも前面、すなわち顔として展覧事業があるが、その展覧会の規模に応じて、大型ホール（大阪でいえばＡＴＣホールなど）や小さな画廊まで、担える他施設は多数ある。普及教育事業についても、レクチャールームのある施設（図書館や公民館など）での講演やフィールド行事（歴史散歩、自然観察会など）は独自建物がなくても可能である。調査研究事業は分野にもよるだろうが、筆者自身は昆虫の分類が専門だったので、学生のころ先生から「これからも、どんなところに就職するにしても、顕微鏡ひとつあれば第一線で継続できる研究分野だ」と言われたことがある。なので、世に「展示室しかない」博物館は数あれど、まず作るべきは「収蔵庫しかない」博物館であると私は思っている。

しかし現況として、博物館の収蔵庫はどこも満杯である。筆者が大阪市立自然史博物館での勤務時代に担当していた昆虫分野については、満杯になったところに無理やり押し込んで、それもやりきったような感じで、棚の上にも通路にも標本箱があふれかえっており、通りにくいだけでなく息苦しさもある。

そうなると次にどうするか、というと簡単にスペースが増やせないのなら、館内外に今あるものを後世に引き継ぐ際に、いかに資料の残す価値の有無を判断し、取捨選択するにほかならないということになる（図１）。大阪市立自然史博物館に学芸員として勤務していたころに考えていたことを以下に記したい。

なお、本稿は資料保存のことだけをかなり極端に割り切って書いた文章であり、当然ながら博物館ならば将来的なこと、展示や研究での利用のこと、などを考えながら保存する必要があることは言うまでもない。

図１. 収蔵スペースが増やせないのなら、資料の残す価値を判断し、取捨選択するしかない。

* しやけ・しげひこ　追手門学院大学・共通教育機構・非常勤講師（生命の科学）／大阪市立自然史博物館・外来研究員

2．紙資料（図書など）の取捨選択

公式出版物については「所詮コピーである」と割り切るべきである。日本のどこかで誰かが同じ物を必ず持っている。国立国会図書館や地元中央図書館、近隣の大学図書館に所蔵されているものならすべて廃棄して、生物地学の標本資料（後述）のためのスペースを作るべきとさえ私は思って、図書整理の作業をしていた。特にデジタル化やインターネットが普及してからは、文字情報は容易に得られる時代になっている。

日本甲虫学会は近畿甲虫同好会として1946年に発足し、大阪市立自然史博物館の発足よりも以前から、海外等の主要な昆虫学雑誌と交換を行って、多数の雑誌を保有していた。長らく林匡夫氏、林靖彦氏、伊藤昇氏らの自宅に保管してあったが、筆者が1993年に大阪市立自然史博物館に赴任してから、そこへ集められるようになった。しかし、2020年頃から甲虫学会のライブラリーは廃止する方向となり、大阪市立自然史博物館図書室の所蔵がないものはそこへ移管したが、ダブりもたいへん多かった。

それらの処分（移管）を考える上で、まずは国立国会図書館に打診をした。しかしその回答は「海外のものは一切不要、国内の未蔵のものはいくつか移管希望」とのことだった。海外の雑誌には大学図書館でも所蔵がないものもたいへん多く、また敷居の高い大学図書館ではなく国民が広く利用しやすい国会図書館が、これらを所蔵する義務があるのではないかと思った。国会図書館の収蔵方針に疑問を感じた。

幸い、倉敷市立自然史博物館と滋賀県立琵琶湖博物館が引き取ってくださり、貴重な図書資料の廃棄は免れた。

そんな作業をする中で、地域博物館が残すべきはむしろ、公式出版物以外の紙資料ではないかと、ふと思った。すなわち、●●研究会会報と同封されていた名簿や集会の案内などである。作業途中からゴミ箱行きの山とは別の山に置き始めたことがある（図２）。しかし、これらはいずれ再び「残す価値なし」へ移行する筆頭候補かもしれないとも思う。

3．画像資料（静止画・動画）の取捨選択

大阪市立自然史博物館では筆者が赴任した以前から、紙焼き写真資料については専用の台紙とキャビネットが

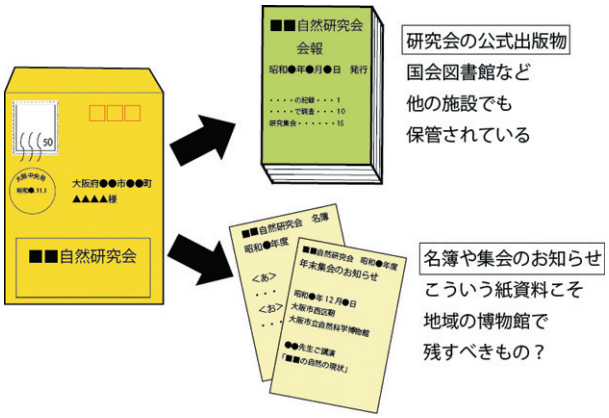


図２．地域博物館が残すべきは、他施設でも保管されている公式出版物ではないのかも?

あって、建設中の博物館など古い写真などがそこに保管されている。動画についても前身の大阪市立自然科学博物館のトカラ列島への遠征（1953年）などのフィルムがあって、石田惣学芸員によってデジタル化されたが（サイトURLは文末）、1980年代ごろのVHSテープも多数あって、キャビネットにしまわれたままになっていた。私はこれらはいずれ見られなくなると思い、自宅にあったVHSデッキを使って2016年前後にデジタル化作業を行なった。既に劣化して見られなくなっていたものもあったが、なんとか多くは変換できたものと思う（日浦勇氏インタビュー1980年など、サイトURLは文末）。なおVHS2025年問題というのがあるそうで、テープが劣化して見られなくなる時期に差し掛かっていると聞くから、VHSのデジタル化は急ぐ必要がある。保存方法も今後、様変わりするに違いないが、とりえずmp4かDVDにデジタル変換しておき、ハードディスクと12㎝の円形ディスクでダブルで保管しておけば、後年でもなんとかなるだろうと思っている。

図3. 写真資料は人や風景が面白い。1995年9月の筆者(26歳)。生物の生態や標本の写真はいずれ技術が上がり、取り直しになるから、日々せっせと撮影しているものはいずれ価値が無くなる。

これらのコンテンツについて、作業をしていて面白いと思ったのは、やはり風景や人物が現代と大きく異なる点である。「えー、このころこんなに草原がひろがってたのかー」、「おー●●さん、若―い！」、などであった（図３）。近年は個人情報に配慮して、顔が映らない広報用記録写真を撮りがちであるが、それでは面白くないから、表に出さない記録写真も撮

影すべきである。

もちろん生物や化石の写真はたいへん多数あるが、技術は日々どんどん発展しているので（白黒の標本写真を保存する意味はあるだろうか？）、当然ながら新しく取り直したほうが断然きれいである。なので、これらの保存価値は絶滅危惧種などの一部を除き、まず無いと考えられるから、地点データ等のないものからどんどん捨ててよい。

そしてこのことは、私たちが日々、せっせと撮影しているものについても、いずれ価値がなくなるものがほとんどであることを意味する。

4．生物化石地質等の標本の取捨選択

（1）同一種はたくさん必要か？

「なぜ同じ種類の標本をたくさん所蔵する必要があるのか？」というのは博物館を担当される行政側から、しばしば尋ねられる質問である。「同じ種でも色彩などのバリエーションや体長の違いがあり、またその種の出現期を知るためには、どうしても一種でたくさん所蔵する必要が出てくる」という説明をすることになる。また同じ産地のものは１点に絞ればいいかというと、その標本が失われた時のために、できれば複数あったほうがいい。また外国の博物館との交換にも出せる。このように欲を言い出せばキリがない。

同一種をたくさん保有することで研究に役に立ったことがある。京大理学部の曽田貞滋教授（当時）が博物館においでになって、オサムシの体長の計測をせっせとされていたことがあった。この成果は昆虫学会誌において発表され（曽田ら，2002）、昆虫学会賞を受賞された。このような機会があったりすると、やはり同一種でも取捨選択などはせず、すべて保管すべきなのかと思ってしまう。しかし、スペース問題というのは背に腹は代えられないので、要らないと判断して捨てる判断を積極的にすべきだと思う。

まずは産地データのないものは廃棄すべきであろう。「かつては展示に使える」「消耗品として使える」などと残してしまったことがあるが、そのような機会は実際にはほとんどない。大量にカブトムシの飼育標本がラベル無しで残されていて、ワークショップに使えると思っていたが、それらが活用される機会はほぼないし、仮にそういうワークショップなどの機会があっても、普通にデータラベル付き標本を使えばいいのである。

分布地が限定されている種は絶滅危惧になっている場合も少なくないが、大阪府と奈良県にまたがる金剛山地にすむコンゴウオサムシの標本は数がたいへん多く、現地の野山の生息数より、博物館の保有個体がほうが多いとさえ言われる。同一種であっても東北産・九州産など地域的バリエーションでもあればいいが、コンゴウオサムシにはそれさえもない。自然史学的長期の視点から見れば、ホモサピエンスという動物が入れ替わり立ち代わり、その山に入ってその虫を採った記録にすぎない。このようなものは取捨選択してもいいように思う。同様に愛好者がたくさん採集し、各博物館の収蔵スペースを圧迫しているものにギフチョウがある。取捨選択して廃棄する勇気をどこかで持つべきだと思う。デジタル写真あるいは産地・日付・採集者のデータだけでも文字で残せればベターだが、通常はそんな余力はない。

（2）虫害との向き合い方

昆虫標本の場合、虫食いの被害に遭う可能性があり、場合によっては跡形もなく針と粉だけになってしまう。この点は他の資料と異なり、かなりデリケートに扱う必要がある。古い学校などから「倉庫に保管されていたものを引き取ってほしい」と依頼があって見に行っても、すき間だらけの標本箱の中に粉が吹いた昆虫標本ばかりで、うんざりしたことがある。

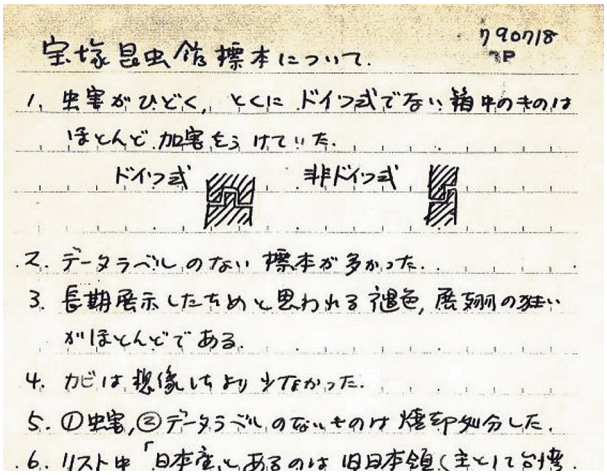
虫食いにあって、展示にも研究にも耐えないものは捨ててよい。ところがこのような虫食い昆虫標本を「捨てる作業をしている」と写真付きで旧 Twitter に書いたことがあるが、閲覧者からのリアクションとして「そんな標本でも DNA は残っているじゃないか、捨てるべきではない」というものがあった（図４）。それは確かにそうなのだが、「ほんなら、あんた保管してくれるんか？」と言いたかった。理想はさておき、現実的には捨てる判断と勇気は必要である。

1939 年に開館し、好評を博したという阪急グループの宝塚昆虫館の標本がある。外国の大型美麗昆虫のほか、地域の当時の貴重な標本も多く含まれているが、1968 年の閉館後、倉庫に押し込まれたままになっていたという。1979 年に大阪市立自然史博物館に移管され、すで

図４. 旧Twitterで書き込み。理想を言うのは簡単です。

にだいぶ傷んだ状態であったというが、ホコリもかぶり退色等もひどいものの、虫害という点では意外に無事であったという印象である。受け入れ担当だった日浦勇学芸員（当時）のメモが残っていて、箱がドイツ式ですき間のない良好な標本箱であったことが幸い、虫害を防げたことが書かれてあった（図５）。戦前ながらも箱にお金をかけていたことが、これらの標本が今日まで受け継がれた例であるといえる。

昆虫標本の存在に気をかける人がいる間はいいが、宝塚の例を出すまでもなく、いつかは誰も情熱を失った


宝塚昆虫館標本について。 790718 P

1. 虫害がひどく、とくにドイツ式でない箱中のものはほとんど加害をうけていた。

ドイツ式　　非ドイツ式

2. データラベルのない標本が多かった。
3. 長期展示したためと思われる褪色、展翅の狂いがほとんどである。
4. カビは想像ほど少なかった。
5. ①虫害、②データラベルのないものは焼却処分した。
6. リスト中「日本産」とあるのは旧日本領（主として台湾）。

図５. 宝塚昆虫館からの移管標本を受け入れた日浦勇元学芸員のメモ。

図６. 宝塚昆虫館からの移管標本。標本箱の質がよかったため、展示されていた当時のまま残っていた。

り、その情熱の人がいなくなったり、して、放置されるかもしれない。なので、そうなってもいいように、良質な箱を使うなど事前から準備しておく必要はあるだろう。宝塚の例は幸運だったとしかいいようがない（図６）。

５．まずは「収蔵庫しかない」博物館から

京都府舞鶴市の昆虫研究家、黒田悠三さん宅には地域の先人らの昆虫標本を自宅に多数抱えておられる。訪問時に「僕がいなくなったら、この標本はどうなるんだろう」というボヤキとともに標本箱の山を見せていただいた。京都府北部地域では他にも自宅に昆虫標本を抱えておられる方があるそうで、合計約 77,000 点にも上るという。地域住民への理解を促すべく、毎年夏、昆虫展を開く活動もされている。目指すは「京都府立自然史博物館」であるという。京都府は京都市など南部地域の歴史的文化財保存に力を入れているので、自然豊かな北部地域での自然文化振興というのは理にかなっていると思う。しかし、フルスペックの博物館を目指すのは当然であるものの、やはり現実は厳しいものがある。冒頭に書いたように、他の事業は他施設を利用できるから、まずは「収蔵庫しかない」博物館、つまり資料の保管事業から開始するということだと思う。

そして、保管に意欲のある方が動けるうちに、現実に出来るところから動くということだと思う。たとえば学校の空き教室でもすき間風の入る空き倉庫でも、雨風さえしのげれば、密閉度の高い標本箱を用い、年に１度、防虫剤のチェックをすることで、完全な消失は免れる。上述の宝塚昆虫館標本の例もある。退色など標本のコンディションは悪化するだろうが、それが現実なのだから

仕方がない。標本所有者もいつまでも自分のものとは思わず、「いつかは自分ものではなくなること」を強く自覚する必要がある。

6．最後に

何世紀もあと、自然史分野の歴史的記述として「21世紀の前半ごろはたくさんの資料があったが、ハード面で国・自治体や財政や世間の理解がなく、たくさん失われた」と書かれるだろうと想像される。そうならないためにも、今はある意味、正念場である。日本はそんなに狭い国でも貧しい国でもないと思うのだが、文化的にたいへん劣っているのではないかと思わざるを得ない。

本稿を執筆するにあたり、大阪市立自然史博物館で2017年から24年まで図書アルバイトとして勤務されていた大戸摩耶さんに感謝したい。書庫から出てきた紙資料を前に、一緒に頭を抱えながら保存／廃棄の決断の議論をしていたことが、本稿のベースとなっていると言っても過言ではない。できるだけ多くの資料を良い状態で残したい最善の道がスペースの理由で閉ざされている中で、取捨選択しながらセカンドベスト、サードベスト、さらに妥協した道を、いつも一緒に真面目に考えてくださった。

【引用文献】

曽田貞滋・高見泰興・久保田耕平・石川良輔（2002）オサムシ類の体サイズの地理的変異；気候適応と種間相互作用がもたらすパターン．昆虫ニューシリーズ : 88 − 97．日本昆虫学会

【引用サイト】

「トカラの島々」（大阪市立自然科学博物館 , 1953年）https://www.youtube.com/watch?v=vHgghBbEdpA

日浦勇氏インタビュー 1980年（大阪市立自然史博物館）https://www.youtube.com/watch?v=WVO0wyEBVHs